

平成 18 年 7 月 18 日
文 部 科 学 省
物理チャレンジ組織委員会

国際物理オリンピック参加生徒の成績について

文部科学省では、(独)科学技術振興機構を通じて、国際科学オリンピックに参加する若者を支援する事業を実施しておりますが、このたび、シンガポールで開催された「第 37 回国際物理オリンピック」において参加した生徒が銀メダル等を獲得したとの連絡を受けましたので、報告いたします。

1. 受賞状況 : 銀メダル 1 名、銅メダル 3 名、入賞 1 名

2. 出場者 : 5 名の高校生 (日本からは初めての参加)

3. 受賞者詳細 :

銀メダルおよび国際物理オリンピック会長賞

	洛南高等学校 3 年 (京都府)	ひきた 足田	たつゆき 辰之	さん
--	------------------	-----------	------------	----

国際物理オリンピック会長賞 (初参加国の中で最高得点)

銅メダル	麻布高等学校 3 年 (東京都)	たなか 田中	よしき 良樹	さん
------	------------------	-----------	-----------	----

銅メダル	西南学院高等学校 3 年 (福岡県)	たにざき 谷崎	ゆうや 佑弥	さん
------	--------------------	------------	-----------	----

銅メダル	ラ・サール高等学校 3 年 (鹿児島県)	のぞえ 野添	たかし 嵩	さん
------	----------------------	-----------	----------	----

入賞	灘高等学校 1 年 (兵庫県)	むらした 村下	ゆうと 湧音	さん
----	-----------------	------------	-----------	----

4. 参加国数 : 86 カ国 (オブザーバー参加国含まず)

5. 期間/場所 : 平成 18 年 7 月 8 日 ~ 17 日 (開会式 9 日 ~ 閉会式 16 日)
シンガポール

6. 派遣機関 : 物理チャレンジ組織委員会

(お問い合わせ)

文部科学省 科学技術・学術政策局基盤政策課

物理チャレンジ組織委員会事務局 (日本科学技術振興財団)

第 37 回国際物理オリンピック「PhO2006」開催概要

名称 : 37th INTERNATIONAL PHYSICS OLYMPIAD, IPhO-2006,
会期 : 2006年7月8日 ~ 7月17日 10日間
開催地 / 会場 : シンガポール共和国 / 南洋工科大学 (Nanyang Technological University)
共催機関 : シンガポール教育省 国立シンガポール大学 南洋工科大学
シンガポール国立教育研究所 (大会事務局) シンガポール物理学会
IPhO2006ホームページ : <http://www.ipho2006.org/>

日本選手団の主な日程 :

2006年 7月 8日 (土) 日本出発・シンガポール到着
7月 9日 (日) 開会式 (於 Nanyang 講堂)
7月 10日 (月) 理論問題試験
7月 12日 (水) 実験問題試験
7月 16日 (日) 閉会式・表彰式 (於 Nanyang 講堂)
7月 17日 (月) シンガポール出発・日本帰着

上記以外の日は、体験見学会やノーベル賞受賞者講演会などが行なわれた。

国際物理オリンピック代表選手および引率役員のコメント

代表選手コメント

田中 良樹 さん

はじめは、国際大会に来られるとは考えられなかったので、表彰されたとき感動した。会場となったナンヤン工科大学は国際的であり、勉強をするためにとても素晴らしい大学だと思った。

谷崎 佑弥 さん

素晴らしい体験をすることができた。英語で他の国の人たちと話すこともできた。問題は解いていて面白かった。実験も量子光学の問題でやっていて楽しかった。日本代表選手全員が入賞できて嬉しかった。

野添 嵩 さん

僕には手が届かないと思っていた物理オリンピックに参加でき、素晴らしい体験をさせて頂いた。他の国の選手と話ができたし、ナンヤン工科大学もとても良いところで、シンガポールに来て良かった。

疋田 辰之 さん

メダルがとれてとても嬉しい。大会を通じて貴重な体験をすることができた。

村下 湧音 さん

これからも更に上をめざして頑張ります。

引率役員コメント

長谷川 修司 日本代表選手団団長 (東京大学大学院理学系研究科)

国際物理オリンピックに初めて日本から選手団を送って好成績を残すことができ、大変うれしい。当初の予想を超えて、銀メダル1個、銅メダル3個、入賞1個という全員入賞の成績はうれしい誤算。全選手の得点を見ると、世界の高校生のレベルの高さがわかるが、日本の高校生も頑張れば決して負けないことが示された。日本代表選手5名には、心からご苦労様と言いたい。この体験を生かして、世界に大きく飛躍して欲しい。

日本国内でも、このような世界的イベントをメダルの数だけで評価せずに、国際交流や物理教育の議論の場としてもっと知ってもらいたい。

今回の日本代表につづき、物理で世界を目指す高校生が次々と出てくることを願う。

北原 和夫 物理チャレンジ組織委員長 (国際基督教大学)

役員も選手も初めての経験であり、昨年の「物理チャレンジ」から始まり、本番に備えての様々な準備、現地に入ってからの問題の調整、翻訳、採点、その集積修正会議など様々な仕事全て初めてで手探りの状態であったが、役員と選手の大奮闘と周りの方々の献身的なご支援により、先ずは初回としては良い成果を挙げることができた。選手も、役員にとってもまさにパイオニアとしての大変貴重な経験であったので、今後活かして行きたい。

国際物理オリンピック (International Physics Olympiad)」について

国際物理オリンピックは、1967年にポーランドのワルシャワで第1回大会が開催された物理の国際的なコンテストである。各国から高等教育機関就学前の若者が参加し、物理学に対する興味関心と能力を高め合うとともに、参加国における物理教育が国際的な交流を通じて一層発展することを目的としている。科学・技術のあらゆる分野において増大する物理学の重要性、次世代を担う青少年の一般的な教養としての物理学の有用性に鑑み、毎年開催されている。参加資格は、20歳未満で且つ大学などの高等教育を受けていないこととされている。

各国から最大5名の選抜された代表選手たちが、リーダーやオブザーバーからなる引率役員とともに参加する。10日間という長い会期のあいだ、選手は理論問題・実験問題にそれぞれ5時間をかけて挑戦するほか、開催国の文化に根ざした様々なイベントに参加することを通じてほかの国からの参加者や主催者と国際的な交流を深めることができるように構成されている。

大会への参加国は毎年増えており、2005年のスペイン・サマランカ大会には、72カ国から300名以上の生徒等が参加。今回のシンガポール大会には86カ国（オブザーバー参加国を含めると93カ国）から400名近い生徒が参加している。我が国はこれまでオブザーバーの派遣にとどまっていたが、今大会に初めて日本代表生徒5名を派遣した。

物理チャレンジ」と日本代表選手5名の選考経緯について

日本代表として世界大会に臨む5名は、昨年行われた日本で初めての全国規模の物理コンテスト「物理チャレンジ2005」において大変優秀な成績をあげ、その後の通信トレーニングや合宿により最終的に選考選抜された。

第1回全国物理コンテスト「物理チャレンジ2005」は、100年前のアインシュタインの業績を記念して国連総会で決議された「世界物理年 World Year of Physics 2005」であった昨年、「国際物理オリンピック」の形式に則り、日本物理学会、応用物理学会、日本物理教育学会および岡山県・岡山光量子科学研究所を共同主催者として物理チャレンジ2005組織委員会を設立し、文部科学省、岡山県教育委員会の後援、科学技術振興機構の特別協賛のほか民間企業からの支援などを得て、2005年8月12日から15日までの3泊4日、岡山県青少年教育センター閑谷学校（備前市）とメルパルク岡山（岡山市）を会場として開催された。

「物理チャレンジ2005」では、まず2005年3月に、国内のみならず海外を含めて参加申込みのあった高校生、20歳未満の高校卒業生、中学生および高等専門学校生282名に対して、応募問題を送付した。それに解答を寄せた生徒は188名であり、その中から選ばれた100名が8月の「物理チャレンジ2005」に参加し、理論問題・実験問題ともそれぞれ5時間ずつのコンテストに挑戦した結果、成績優秀者に金賞が6名、銀賞、銅賞がそれぞれ12名、ほか18名に褒賞、59名に奨励賞が贈られた。この金銀銅賞受賞者30名の中から、10月に「国際物理オリンピック」の派遣代表候補者12名を選び、インターネットを利用した毎月の「通信添削」などにより実力の涵養を図った。さらに、3月21日～24日に行われた3泊4日の合宿研修を経て決定された日本代表5名には、引き続き国際物理オリンピックに対応するためのトレーニングを行い、今大会参加に備えた。